

地球惑星科学と社会：現状とあるべき姿

Earth and planetary sciences for society

松井 孝典 [1]

Takafumi Matsui[1]

[1] 東大・院・新領域

[1] Grad. Sch. of Frontier Sci., Univ. of Tokyo

人間圏にとっての最大の課題は、いつの時代にあっても、その安全のための方策(危機管理システム)を如何に構築するかにある。安全を脅かす原因としては、人間圏内部に内在するもの(例えば安全保障問題、国際金融危機など)と、地球システムと人間圏の関係性に起因するもの(例えば環境問題、自然災害など)とに大別される。人間圏がまさに地球規模であるという意味で、21世紀の人間圏にとっては、特に後者に対する危機管理システムの構築が重要である。

一方、文明(即ち、人間圏を作って生きるという生き方)の発展は、我々の認識する時空の拡大をもたらし、137億年の時空スケールで我々の存在の意味を問うことを可能にした。我々は人間圏を作って生きるという意味で、それ以前の人類(生物圏に閉じて生きる、即ち生物圏を構成する種のひとつ)とは全く異なる存在である。我々は今始めて、我々とは何か、我々は何処から来て、何処に行くのか、という根源的な問いを問える地平に生きている、といえよう。

この二つの問題は、人類という知的存在にとって、究極の課題ともいえるが、まさに地球惑星科学は、この二つの問題を学問のゴールとする。従って、地球惑星科学は、知的に本来極めて魅力的な学問であると共に、社会への直接貢献も大なる学問でもある。

少し具体的に言えば、いわゆる宇宙論と文明論とを結ぶのが、この学問の特徴である。又生物学も包括する。例えば、地球システムにおける人間圏という認識は、生物学からは導きえず、現生人類の特異性が何処にあるのかという認識は、生物学的人間論、あるいは哲学的人間論からは導き得ない。このような意味で今我々が突きつけられているのは、地球学的人間論の構築である。

本来はそのような魅力的な学問であるにもかかわらず、社会的にはそのように認知されていない。本セッションの他の講演のタイトルから判断する限り、その現状の一つ一つが紹介され、それに対する方策が述べられることと思うのでここでは繰り返さない。その原因は多様である。しかし明らかなことは、この分野を構成する個別の学問が誕生、発展してきた過程において、それぞれの分野に固有の背景を反映し、互いにそれぞれのニッチに住み分けて発展し、互いに相互作用を嫌う風土が生まれたこと、したがって、冒頭に述べたような学問の面白さが、社会からも同業の研究者からさえも見えにくくなったことなどが挙げられる。

この現状を打開し、未来に明るい展望を切り開くためには、この分野の研究者自らがその発信能力を高め、その学問の魅力を社会に伝える努力をすることが肝要であることは言うまでもない。又、他の分野の人材と比べても見劣りしない、この分野の未来を担える人材(学問分野におけるスター)を発掘し、彼らを、全体が支える仕組みを構築することも必要である。一方で、実学として、地球環境問題、自然災害問題においてそのリーダーシップを発揮する必要がある。